

和夫はこわばらせた表情で、夫人がいよいよ白いパンティだけの半裸になって背中を向けているその光景にすっかり興奮し、顔を燃えるように赤らめていた。

「奥様、こちらに来てお酌をしてくださいな。さあ、早く来なさい！」

達志がワイングラスをぐいっとひと飲みにすると、夫人にワインボトルを注ぐように要求する。

「奥様、お立ちになってください。もうここまでしたのです。度胸を決めてくださいな」

富が酌をするように急かした。幸子夫人は、重いしぐさで立ち上がると、達志のすき焼きの鍋を挟んだ向かい側に正座した。片手で胸を隠したまま、ワインのボトルを手にして、グラスに注ぎ入れる。

「奥様からこうしてお酌をしていただけるとは、光栄なことです。しかも奥様の美しいお体を拝見しながらお酒を飲めるとは男冥利に尽きますな。さあ、その手をのけて、奥様の胸をはっきりとお見せください。」

呼応して富が後ろから手を伸ばして、夫人の胸をおおっている手をそっとつかみ

下げさせる。かすかな抵抗を示した夫人だが、あらがっても仕方がないことを悟り、富に任せて、胸を覆った腕を下げていった。

「想像していた以上に綺麗な胸ですな。形といい色といい、まったく男心をくすぐる魅力的な乳房です。それに乳頭もきれいなものだ。あのような年頃のお嬢様がいるとはまったく思えませんよ。まるで少女のような可憐で初々しい果実ではありませんか」

乳房を凝視される耐え難い視線に夫人は下げた腕で胸を隠すそぶりを見せると、

富が後ろからぴしゃりとその手の甲を叩いた。

「富、奥様に乱暴はいけないよ。」

達志が笑う。

「これは失礼しました。少しばかり酔ったようです。奥様、非礼をお許しく下さいませ」

富は慇懃に手を叩いたことを詫びるが、その目も笑っている。自分の席に座り、夫人の哀れな姿をじっくり見ようとする富は、目を細めて夫人の乳房を眺めた。

「まったく女の私もくらくらするような綺麗なお体ですわ。この胸など、妬ける

ほどにお美しい」

富が夫人の乳房に触れようと手を伸ばした。夫人の上半身が富の手から逃れようとする。

「じっとしていなさい！」

富が叱った。きびしい口調であった。使用人に厳しく命令されたことに自分の立ち場を突きつけられた夫人は唇を噛む。

「柔らかな胸ですわ。それにいい匂いで
すこと」

幸子の美しい顔が乳房に触られる恥辱感にゆがんだ。その哀れな表情が達志の欲情を誘う。

「では私も奥様のおっぱいを触らせていただきますでしょうか」

達志は立ちあがると、正座する夫人の脇に歩み寄り、その場でしゃがんだ。そして手をゆっくりと伸ばすのだ。

「これは実にいい感触だ。柔らかくて、しかし、確かな弾力がある。戦地の旦那様はこのようなすてきな奥様の身体にさぞ未練を残されたでしょうな」

富と達志に両側を挟まれた格好で正座する夫人は目を閉じてその騁りに必死で耐えている。閉じた瞳から涙がこぼれ、頬を濡らしていた。その夫人の身体が時折、

ぴくっとはねるのは、達志と富が乳房を愛撫し始め、乳首までも指で揉みしごくからである。

「奥様はお感じになっているようすな」

「使用人の手で騷られ、さぞお悔しい気持ちでいっぱいでしょう。でもこれも生きるためです。お嬢様との生活を守るためです。そう思えば、さほどの辛さもないでしょう。さあ、和夫も奥様の胸を触ってみなさい」

和夫もおずおずと立ち上がり、場所をゆずった富の位置にしゃがみ、夫人の胸に震える手を伸ばした。

「まあ、和夫さんは元気ですわね」

富が、着物のすそが割れて、和夫のすっかり勃起した股間の状態を見てからかう。和夫は富のからかいに耳も貸さず、夫人の乳房を手の平で撫で、指で揉み、乳首を指腹で転がした。夫人の反応がさらに和夫の手の動きを大胆にさせていく。幸子夫人は顔を上気させ、呼吸を乱しながら目を閉じていた。その羞恥心で顔を桜色に染めた美しい横顔を堪能しつつ、乳房に執着する。

「奥様、ではそろそろ下のお履物を脱いですべてを見せていただきますでしょうか」

達志が夫人の後ろからわきに手を差し込んで立たせようとした。

「…せめて、お部屋を暗くしてください…」

夫人は今にも泣き出しそうな声で、部屋の電灯を消してほしいと懇願した。

「何をおっしゃるのです。暗くしてしまえばせっかくの奥様の大切なところが見えないではありませんか。これから奥様は恥ずかしいところを私どもにじっくりとお見せくださるのではありませんかな？」

達志は苦笑しながら、夫人の身体を支え、

その場に立たせた。夫人の髪の香りが達志の鼻腔に流れ込み、股間を硬くさせた。これほどに勃起するのは、実に久しぶりである。その固くなったものが夫人の臀部にあたり、それだけで自失しそうになるのだ。女遊びにたけている達志だが、これほどに幸子夫人の気品溢れる魅力に魅入られてしまっていることにあらためて気づかされた。

「では富がその下履きを脱がせてあげましょう」

富が夫人のパンティに手をかける。

「このような下穿きをお召しになっ

るとは、さすが奥様ですわ。」

パンティなどこの戦時中には上流社会の女性でしか身につけられないものである。

一般の女性の下着はというと、腰巻の着用が多かった時代である。もんぺの着用により陰部を直接に包み込むズロースがようやく普及してきたころでもあり、幸子夫人のようなパンティは、外国からの輸入下着でしか手に入らなかった時代であった。

「シルクですわね」

後ろから夫人の下着に手をかけた富がその手触りと光沢感を賞賛する。

「僕にもやらせてよ」

和夫が夫人の前に立った。乳房を愛撫した和夫はすっかり興奮しており、夫人のパンティを脱がせるという行為に積極的になっているのである。

「では一緒に奥様の下穿きを脱がせてさし上げましょう」

「い、いや…いやです…これ以上は耐えられません…」

夫人の泣き声が響く。夫人は堪えかねてとうとう泣き出したのだ。

「泣いたりしたらだめでしょう。これもすべてお嬢様のためですよ」

後ろから身体を支えている達志が耳元でささやきかけた。夫人は弱々しく首を振ったが、その後は観念したかのように達志に身を預けた格好で、前後から伸びる手でパンティをおろされる行為を甘んじて受け入れている様子である。

「奥様のお尻がお顔をお出しになりましたわ。丸みを帯びたなんて形のよいお尻でしょう。それに真っ白なお肌はつるつるではないですか」

富の目に夫人のむっちりとした肉感的な双臀が飛び込んでくる。その双丘の狭間の切れ込みは深く、その奥底に夫人の秘

部が隠されていることなどまったくおく
びにも出さない淑やかな様相で、芸術品
のような美しい曲線の臀部だった。

一方、無言で富と一緒に夫人のパンテ
ィに手をかけている和夫は恐ろしいほど
に目を見開き、股間の中心部に漆黒の恥
毛がまるで絹草のように柔らかく生えて
いる夫人のそけい部を凝視していた。女
性の裸を見るのも初めてならば、そのよ
うな女の源泉を目にするのも初めての少
年である。パンティを夫人の太股に絡め
させたまま、視線は柔らかで匂うような
夫人の妖艶な足の付け根に釘づけであっ

た。

「和夫さんは声も出ないようですわね。
じっくりと見てさし上げなさい。これが
女というものですよ」

富は夫人のパンティを足から抜き取ると、
脱がせたばかりのまだ体温のぬくもりが
残っているそのシルクの下着を和夫に向
けて広げてみせる。光沢のある白いパン
ティの夫人の恥部に触れていた部分が無
残にあばかれる。夫人は脱がされたばか
りのパンティを少年に見せつける光景を
目にすると朱に染まった顔をそむけた。
唇をかんで身を裂かれるような羞恥にた

えることしかできない夫人であった。

「高級そうな下穿きですわね。奥様のお着物もいよいよ、お米やお野菜と交換してしまいましたから、これからは奥様の下穿きをいただいて交換してまいりましょうかね。このような高級な下着でしたら、きっとどっさりと交換してくれますわよ」

冗談とも本気とも取れる富の言葉に達志が下品に汚れた歯を見せて笑う。

「いよいよ奥様は、下着まで全部手放してしまうのですな。それは不憫だ。せめて一枚は残してやりませんか、下穿きな

しでお過ごしにならなければなりませんな。はははは」

「奥様、足をもっと開いてください」

下から和夫が夫人を見上げた。夫人は、和夫を見て激しく羞恥する。和夫は股間の間近でしゃがみこみ、顔をくっつけるようにして夫人の最も隠しておきたいところをじっと見ているのだ。和夫の吐く息までも、直接、夫人の股間にかかるような位置で凝視しているのに、さらに足を開くように要求するのだ。

「奥様、あんよを大きくお開きになって、和夫さんに女の身体を教えてやってくだ

さいまし。和夫さんはまだ女を知らない童貞ですから、奥様のようなすてきな女性に筆おろしをしていただければそれだけで幸せ者というものです。でもその前に女の構造を勉強させてやってくださいまし」

富が内股をそろりそろりとさすってくる。

「そ、そんな・・・」

夫人は絶句した。なんという恥辱的な行為を要求するのであろうか。恥ずかしいところを開いて、和夫に女の構造を教えろと富は言うのである。そんなことなどできるはずもない。無理な要求を突きつ

けておいて富はいかにもうれしそうに笑っている。

「あんよを開くだけでは足りませんわね。奥様のその白魚のような指で左右に開いてざっくりとお腹の中まで和夫さんに見せてやってくださいまし。ほほほほ」

ヤニのついた前歯を出して富が下品に笑う。

「それでは奥様がかawaiiそうだ。ご自分の指であそこを開いて年端もいかない和夫にすべてをさらけ出すなどできるはずもあるまい。商売女ならいざ知らず、子爵夫人の奥様にはちと厳しすぎる要求で

すぞ」

達志は富と顔を見交わして今にも吹きだしそうな表情になっている。ねちねちと全裸に剥いた貴夫人をなぶることに悦に入っている。

「いいえ、奥様はこれくらいできなければいけませんわ。これも奥様とお嬢様が二人して生きるためですから」

富はすっかり責め手となって、夫人に恥辱の行為を強要させようと意気込んでいるのだ。